

小学校体育授業における教科内容に関する理論的知識への介入が 教師の言語的相互作用に及ぼす効果

— 教職経験年数 5 年目の教師の事例を対象にして —

谷尾 康太 (兵庫教育大学大学院)

1. 目的

本研究では、「教科内容に関する理論的知識」への介入（資料の提示および解説・実技）が、教師の言語的相互作用に及ぼす効果について、学習成果との関係から明らかにすることを目的とした。

2. 方法

- 1) 対象者：小学校 6 年生を担当している教職経験年数 5 年目の男性教師
- 2) 単元：介入前「短距離走」（5 時間）、介入後「ハードル走」（8 時間）
- 3) 学習成果：情意的側面、認知的側面、技能的側面の 3 つの側面から評価した。
- 4) 品詞分析：上原・梅野（2000）の品詞分析法
- 5) 介入方法：「教科内容に関する理論的知識」の内実である、「運動の構造的知識」・「運動のつまづきの類型に関する知識」・「効果的な指導プログラムに関する知識」に関わる資料を提示した。さらに、資料の内容の解説及び実技を含めた研修により介入を行った。

3. 結果と考察

- 1) 学習成果：情意的側面
介入後の「ハードル走」の授業では、男女とも態度得点（小林，1978）が向上した。
- 2) 学習成果：認知的側面
介入後の「ハードル走」の授業では、「よい授業への到達度調査」（小林，1978）の「新しい発見」項目に対する記述内容は、単元経過に沿って各共有課題の中心に関する記述の比率が凸型傾向を示した。
- 3) 学習成果：技能的側面
介入後の「ハードル走」の授業では、単元前【50m ハードル走タイム：12.09±1.07 秒，ハードルタイム比：77.16±4.93%】に比べて、単元後【50m ハードル走タイム：10.64±0.98 秒，ハードルタイム比：87.69

±4.32%】であり、それぞれが有意（ $p<.001$ ）に向上した。

ただし、単元終盤（5 時間目から 8 時間目）に記録の停滞が認められた。

4) 品詞分析からみた教師の言語的相互作用の変容
品詞総数は、介入前の「短距離走」の授業では平均 3,444 語であり、介入後の「ハードル走」の授業では平均 3,766 語であり、品詞総数に有意差は認められなかった。

IW 品詞の使用頻度を比較した結果、介入後の「ハードル走」の授業では、名詞（人名）、名詞（身体部位）、副詞（語の副詞）の 3 種類において使用頻度が有意（ $p<.05$ ）に増加したことから、児童一人ひとりを対象にした「矯正的（技能的）フィードバック」に関わる相互作用を積極的に展開させていたものと考えられた。

一方、副詞（叙述）と形容詞（二項対立）の使用頻度は、介入後の「ハードル走」の授業においても低い値を示していたことから、「問いかけ（発問）」に関わる相互作用の積極的な展開は認められず、「実践的知識」の獲得の重要性が示唆された。

4. 結論

「教科内容に関する理論的知識」への介入は、児童一人ひとりを対象にした「矯正的（技能的）フィードバック」に関わる教師の言語的相互作用の展開に影響を及ぼすことが認められた。さらに、このことが結果として学習成果（態度得点、技能）を高めたものと考えられた。

5. 主な参考文献

上原禎弘・梅野圭史（2007）体育授業における教師と児童の言語的相互作用の適切性に関する研究—小学校高学年のハードル走授業を対象にして—。体育学研究，52（1）：1-17。